日蓮大聖人御書全集

光日上人御返事（こうにちしょうにんごへんじ）

新版
1264
～
1267

光日上人御返事

弘安4年('81) 8月8日　60歳　光日尼

法華経二の巻に云わく「その人は命終して、阿鼻獄に入らん」云々。阿鼻地獄と申すは天竺の言、唐土・日本には無間と申す。無間はひまなしとかけり。一百三十六の地獄の中に、一百三十五はひま候。十二時の中に、あつけれども、またすずしきこともあり。たえがたけれども、またゆるくなる時もあり。この無間地獄と申すは、十二時に、一時かた時も大苦ならざることはなし。故に、無間地獄と申

す。この地獄は、この我らが居て候 大地の底二万由旬をすぎて、最下の処なり。これ、世間の法にも、かろき物は上に、重き物は下にあり。大地の上には水あり。地よりも水かろし。水の上には火あり。水よりも火かろし。火の上に風あり。火よりも風かろし。風の上に空あり。風よりも空かろし。人をもこの四大をもって造れり。悪人は、風と火とまず去り、地と水と留まる。故に、人死して後重きは、地獄へ堕つる相なり。善人は、地と水とまず去り、風・火留まる。重き物は去りぬ。軽き物は留まる。故に軽し。人天へ生

まるる相なり。

地獄の相、重きが中の重きは無間地獄の相なり。彼の無間地獄は縦横二万由旬なり。八方は八万由旬なり。彼の地獄に堕つる人々は、一人の身、大にして八万由旬なり。多人もまた、かくのごとし。身のやわらかなること、綿のごとし。火のこわきことは、大風の焼亡のごとし、鉄の火のごとし。詮を取って申さば、我が身より火の出ずること十三あり。二つの火あり。足より出でて頂をとおる。また二つの火あり。頂より出でて足をとおる。また二つの火あり。

背より入って胸より出ず。また二つの火あり。胸より入って背へ出ず。また二つの火あり。左の脇より入って右の脇へ出ず。また二つの火あり。右の脇より入って左の脇へ出ず。また一つの火あり。首より下に向かって雲の山を巻くがごとくして下る。この地獄の罪人の身は、枯れたる草を焼くがごとし。東西南北に走れども、逃げ去る所なし。他の苦はしばらくこれを置く。大火の一苦なり。この大地獄の大苦を仏委しく説き給うならば、我ら衆生、聞いて皆死すべし。故に、仏委しくは説き給うことなしと見えて候。

今、日本国の四十五億八万九千六百五十八人の人々は、皆この地獄へ堕ちさせ給うべし。されども、一人として堕つべしとはおぼさず。例せば、この弘安四年五月以前には、日本の上下万人、一人も蒙古の責めにあうべしともおぼさざりしを、日本国にただ日蓮一人ばかり、かかる事この国に出来すべしとしる。その時、「日本国の四十五億八万九千六百五十八人の一切衆生、一人もなく他国に責められさせ給いて、その大苦は、譬えばほうろくと申す釜に水を入れて、ざっこと申す小魚をあまた入れて、枯れたるしば木をた

かんがごとくなるべし」と申せば、「あらおそろし、いまいまし。打ちはれ、所を追え、流せ、殺せ。信ぜん人々をば、田ぱたをとれ、財を奪え、所領をめせ」と申せしかども、この五月よりは大蒙古の責めに値ってあきれ迷うほどに、さもやと思う人々もあるやらん。にがにがしゅうしてせめたくはなけれども、有る事なれば、あたりたりあたりたり、日蓮が申せし事はあたりたり、ばけ物のもの申すようにこそ候めれ。去ぬる承久の合戦に、隠岐法皇の御前にして、京の二位殿なんどと申せし何もしらぬ女房等の集まって、

王を勧め奉り戦を起こして、義時に責められあわて給いしがごとし。

今々御覧ぜよ。法華経誹謗の科といい、日蓮をいやしみし罰と申し、経と仏と僧との三宝誹謗の大科によって、現生にはこの国に修羅道を移し、後生には無間地獄へ行き給うべし。これまたひとえに、弘法・慈覚・智証等の三大師の法華経誹謗の科と、達磨・善導・律僧等の一乗誹謗の科と、これらの人々を結構せさせ給う国主の科と、国を思い生処を忍んで兼ねて勘え告げ示すを用いずして還って怨

をなす大科、先例を思えば、呉王・夫差の伍子胥が諫めを用いずして越王・勾践にほろぼされ、殷の紂王が比干が言をあなずりて周の武王に責められしがごとし。

しかるに、光日尼御前は、いかなる宿習にて法華経を御信用ありけるぞ。また故弥四郎殿が信じて候いしかば、子の勧めか。この功徳空しからざれば、子とともに霊山浄土へ参り合わせ給わんこと、疑いなかるべし。烏竜といいし者は、法華経を謗じて地獄に堕ちたりしかども、その子に遺竜といいし者、法華経を書いて供養せしかば、親、仏

に成りぬ。また妙荘厳王は悪王なりしかども、御子の浄蔵・浄眼に導かれて、娑羅樹王仏と成らせ給う。その故は、子の肉は母の肉、母の骨は子の骨なり。松栄うれば柏悦ぶ。芝かるれば蘭なく。情無き草木すら、友の喜び友の歎き一つなり。いかにいわんや、親と子との契り、胎内に宿して九月を経て生み落とし、数年まで養いき。彼にになわれ、彼にとぶらわれんと思いしに、彼をとぶらううらめしさ、後いかんがあらんと思うこころぐるしさ、いかにせん、いかにせん。子を思う金鳥は火の中に入りにき。子を

思いし貧女は恒河に沈みき。彼の金鳥は今の弥勒菩薩なり。彼の河に沈みし女人は大梵天王と生まれ給えり。いかにいわんや、今の光日上人は子を思うあまりに法華経の行者と成り給う。母と子と、ともに霊山浄土へ参り給うべし。その時、御対面いかにうれしかるべき、いかにうれしかるべき。

八月八日

日蓮　花押

光日上人御返事